

雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	29
ページ	65 - 75
発行年	1894-10-01
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/4445

て、嘗て獲られたる權利を蹂躪せられ、奮然として革命を起すに至りたるもの、其衝動果して何の處に在る。君は唯其の理想中に政治上の自由なる抽象問題を發見せるのみ。單に英國の革命を論ずるに當りては、君の言ふ所素より深く論ずるに足らざる。然れども兩國革命を對比するに方りて、歴史上の經過を比する所なきは寧ろ失當に非ざる乎。僕は英國革命の目的中、明に回復といふ事實問題を認識す。僕の見る所若し皮相なりとせば、君の論は根據なきものといはざるべからざる。眼を轉して佛國を看よ、是等歴史的經過なきのみならず、寧ろ相反するものあるを看む。這般の事實を今必ずしも述べず。君も亦た佛國革命に對しては、其目的の變改——破壊に在ることを承認せらるれば也。要するに、僕は事實上回復と破壊の目的——結果に非ず——あるを認むるなり。君は單に抽象的問題に就きて意見を臆列せるのみ。遠慮なく言はば、考證を缺き、獨斷に馳せたりといはざるべからざる也。約言すれば僕は言ふ、英國の革命は過去の記憶と現在の衝動に由る也。佛國の革命は現在の衝動と理想の衝動とに由る也。敢て信ぜざる所を陳ぶること斯の如し。君尙幸に垂教に吝なる勿れ。終に臨んで一言す、僕はギゾー氏文明史を愛讀すると君の想案したまふが如し。故に僕の稿を起すや斯書を援用して參考に資せり。謹みてギゾー氏の名を文中に引きたるも是が爲めなり。君叮嚀に其出處を指摘す。謹みてうの煩勞を謝する所也。君更に曰くギゾーの文章は奔放飄逸也。僕淺學未だ佛文を解せず。僅に英譯に由てその意見を窺へるのみ。馮んぞ之を評論するを能くせんや、唯君の教示よりてに其文章の卓越するを知れるのみ。賜を享くる所大なり。萬謝々々。尙言ふべきと多し、然れども墨に宿病を發して學年試業を缺き、今に及んで未だ全愈に至らず。思を構へ筆を執るに懶し、加るに編輯の期亦近日に逼る。文辭を修飾するの閑なし。語句禮を缺く。請ふ推讀せよ(十時彌)

雜 報

○第三回卒業式

我校七月十日第三回卒業證書授與式を舉行す。午前八時十五分職員、生徒、招待來賓及び卒業生父兄一同、雨天体操場の式場に着席。先づ中川學校長先學年に於ける學事を報告し、次に卒業證書を授與し、終て學校長の卒業生に對する告辭あり、安河内麻吉君は卒業生總代として答辭を述べ、次に内田教授は教員總代として、村川堅固君は生徒總代として、笹田書記官は來賓總代として各々祝辭を述べ、之にて全く式を終り。卒業生及び來賓には別室よて茶菓を饗し、生徒一同にも茶菓を配布せられたりき。今卒業生の氏名列記せんに次の如し。

第一部 法科

安河内麻吉(福岡) 川淵 楠茂(高知) 鈴木安次郎(福岡) 生駒 武彦(福岡) 成田 唯一(大分) 小橋 一太(熊本)
 鶴田 政吉(長崎) 朝山 景秀(熊本) 多胡敬三郎(長崎) 池内 義重(愛媛) 田中 尙志(熊本) 太田 重知(熊本)
 小川 貞一(長崎) 堀 貞(福岡) 標 卓 爾(福岡) 古閑又一郎(熊本) 佐藤勇十郎(鹿嶋) 野口 彌三(長崎)
 西郷盛太郎(鹿嶋) 眞 崎 誠(佐賀) 柏木 正文(鹿嶋)

第一部 文科

隈本 繁吉(福岡) 白河 次郎(福岡) 受樂院義春(熊本) 羽石 重雄(福岡) 廣田直三郎(福岡) 和 木 貞(宮崎)
 三根圓次郎(長崎) 千佳武次郎(佐賀)

第二部 工科

嶋 重 治(長崎) 城 興三郎(大分) 上野辨次郎(長崎) 山崎魁太郎(福岡) 利根川守三郎(廣島) 松宮重三郎(滋賀)

第二部 理科

安河内健次(福岡) 白壁傑次郎(福岡) 高山 虎太(熊本)

第二部 農科

吉田 武治(福岡) 木下彌八郎(熊本) 岩倉雄太郎(石川) 新野 俊章(福岡)

又學校長の陳述せられたる學事報告は、先學年の學況を知るに足るものなれば、左に之を掲ぐ。
 本日は例に依り本校本學年間の概況に就き一二の要件を陳述せん。

(一)生徒

本學年末生徒現員は三百九十九人にして、之を區別すれば、本科生徒は今回の卒業生四十二人を加へ百六人、豫科生は二百六十人、補充生は三十三人とす。本學年中の入學者及退學者の種類員數を擧れば、入學者七十九人、内他の高等中學校尋常中學校に轉學せし者十人、願に依り退學せし者四十九人、除名の處分を受けたる者二人、死亡者三人。之を各科に區別すれば、本科に三人、豫科に三十九人、補充に二十二人にして、各科の人員に比較すれば、本科は百分の三弱、豫科は百分の十五、補充は百分の六十七弱にして、退學者は級の進むに従て減ず。是れ本校が多年經驗する所、蓋し生徒の年齢及學科は進むに従て、其志望も強固と爲るを證するに足る。

才學年に於ては全く補充科を屬し本科一年級以下各級に生徒若干を募集す。其志願者百餘名而て本校區域内の卒業生にして無試験入學する者凡そ七十餘名、加之第三高等中學に於ては、來學年より高等學校令の一部を實行するとに決したれば、該校より轉學する者本科豫科を併て凡そ六十人、又該校設置區域に屬する尋常中學校の内、大坂、兵庫、嶋根、香川、愛媛、高知の各尋常中學校は、當校の區域に屬するとありたをば、生徒の増員は非常にして、現員より多きと二百名を下らざるべく、教場は増築を要し、教員は不足を生ず。之に處するには亦非常手段を行はざる可らず。然をも教育の暇々進歩するは國家のため慶する所なり。

(二)學科 本科第二部學科中に農科志望生に課する學科課程を加へ、本學年の始より實施したり。

(三)教員 教員の現員は教授十三人、助教授六人、嘱托教員四人、雇教員一人、外國教師一人、都合二十五人あり。

(四)卒業生 本日證書授與する卒業生は四十二人にして、内二十二人は入學試業を経て直に本校に入學したる者、四人は他高等中學校より轉學きたる者、十八人は本校區域内各尋常中學校卒業生にして無試験入學せし者。而て二十一人は法科志望、八人は文科志望、六人は工科志望、三人は理科志望、四人は農科志望生ありと雖も、其内志望の大學に進入する能はざる者數名あり。其理由とする所は、或は身体不健康の爲め、或は家事係累の爲めありと云ふ。而て其年齢は最長二十六年四月最少十九年一ヶ月にして、平均二十二年十ヶ月強あり。

○卒業生送別會

維持明治廿七年七月六日、第三回卒業生送別會を京陵往生院に開く。門前の旭旗は風に翻て此會を盛にし、壇上の大花瓶には溢るゝばかりに美花を挿え、人目を新にしたり。時に炎熱燬くが如し、然れども以て會者の熱誠に比すべくもあらず、午後四時、二百の熱血男兒は既に堂上に會えり。山川端夫氏は起て開會の詞を述べ、且つ卒業生諸子の功勞夥多なりとことを謝え、次

で高月頼章氏及び杉山生の送別の詞あり、松本喜四雄氏懷舊談を爲して卒業生諸子に望み、村川堅固氏は『學生は多く支那人の如く失敗す、古來支那人は軟化によりて失敗せるはあらずや。今日の學生多くは然り。又青年の後年は漫々たる江河の如し、水深く川大にして巨船大船を浮べ、渾浩流轉魚龍中に跳る。然れども此時既に溪澗潺湲として岩に砕け石に激する、透明玉露の如き美觀なきを如何せん』と論し起し、卒業生の責任重大なるに及び、水月哲英氏は一律を朗吟して送別の詞となし、中村厚次郎氏は園田益太郎氏に代りて長詩を吟す。送別の詞既に終りたれば、野口彌三氏は卒業生總代と爲て感謝の意を表せられ、且つ曰く『第一回卒業生を忘吾會舎に送り、又第二回卒業生を雨天体操場に送りしは、實に昨日の如しと雖も、今や自ら送らるゝ身とされり、感慨何ぞ堪えん。今に於て之を考れば、吾人の責任益々大なるを知る。抑も我校は他の學校と目的を殊にす、即ち我校は九州淳朴の特質を保持し、之を以て學生の本領とし、我邦學生の模範たらんとするを以て唯一の方針とせり。且つ思ふ、學生の思想の確乎不拔あるに至るは、尋常中學校に在る時にあらずして、寧ろ高等中學校に在る時あり。夫然り然るが故に諸君は我校に在りて修學する間、周到の用意と誠實ある熱心とを以て、此唯一の方針を確立せざる可らず。殊に來學年より格別ある覺悟あくんばある可らず』と。熱心に吾人の將來に就て告る所ありき。次に朝山景秀氏は隈本繁吉氏の詩を代吟し且つ自作を吟せらる。終りて酒宴に移りたり、酒美あらず、肴佳あらざれども、九州男兒の淳朴表し得て此中に存せり。且つ卒業生諸子より清酒一樽、菓子料若干を辱ふし、之に加ふるに餘興として數番の狂言を演せまめしかば、皆興に入り、一同舊を談じ來を語りて夜に至りき。

○入學式及び特待生選定式

本月十二日午前九時、入學式を雨天体操場に開く。新入學生は南面し、舊生徒は北面し、校長以下は西面して各々整列す。中川學校長は先づ中央の演壇に進み、懇篤ある告辞を述らる。其要旨は筆記して卷首に在り、就て看らるべし。次に新入學生總代渡邊與四郎君は長き告辞を述べ、學上の不振を語り、學務の多難を訴ふ、以て國家守りの才をうんと

ひ、相勵みて輔仁の實を擧げんとを述べ、其より特待生選定式に移る。余田教務は特待生に選定せられたる者を呼出、中川學校長之に選定書を授與す。今其姓名を擧れば次の如し。

大學豫科第三年

西川 文一

村川 堅固

尾形 次郎

大學豫科第二年

杉山 富樫

吉川 岩喜

大學豫科第一年

本 田 弘

舊豫科第二級

緒方十右衛門

舊豫科第三級

緒方惟一郎

次で櫻井教授は演壇に進み、新制度の外國語に就て各科學徒の心得べき條々を略述し、之にて全く此日の式を終らる。

○新入諸君を迎ふ 吾人は先學年に於て四十余名の俊士英才を送り、今學年に於て有爲の新

朋友二百余名を迎ふ。吾人は我校運の駸々乎として隆昌に赴くを慶賀せずんばあらず。新入諸君よ、諸君は九州各縣、及び中國四國の各縣より、此處に來れり。諸君の平素修養して、胸中に蓄積したるもの、必ず多かるべし。諸君は十分に其精を發揮し、其粹を暴露し、以て輔仁講習の實を擧ざる可らず。

我校素より固有の校風存するあることは、我學校長既に之を入學式に於て述べられたり。諸君既に我校に生徒たり、我會に會員たる以上は、之に従はざる可らず、要は唯だ長短相補ふにあるのみ。若し夫れ我校固有の校風と、諸君の齎せる精神とを、打て一團とあすに於ては、勤儉淳朴の風いよく振ひ、我邦學生をして其風を仰がしむるに至ると期すべきあり。

○習學寮 學制改革は終に我習學寮にまでもその影響を及せり。今回數多の新入生徒ありし爲

めに、教室に不足を生じ、本館の圖書教室を事務室に移し、事務室を習學寮南寮の東半に移せしかば、寄宿せしむべき人員を減する必要起りしに、一方に於ては、今度學校衛生上の調査の結果に従て、各自修室の人員を少ふするとなりたれば、ますます寄宿人員を減少せざる可らず。是に於て、寄宿

人員を凡そ二百余名に限り、先づ舊在寮生を入寮せしめ、次で舊生徒にして下宿せし者、及び新生徒の入寮を願出づる者を以て定員を補ふことなれり。之を先學年に比較すれば、習學寮の状況全く一變せるものにして、改革實行の爲めには止むを得ざる所あり。因に云ふ、曩きに秋月教授舎監の職を辞せられしに就ては、當分舎監を置かず、中川學校長親ら舎監の事務を取扱はるゝとあり、

○演說部發會

廿二日午後零時三十分、例の如く土曜會を瑞邦館に開く。今回は新舊兩生徒の見知を主とす。委員も十分に斡旋の勞をとりしかば、會する者三百有餘の多きに達しき。先づ部長福井教授起ちて開會を報じ、本學年間の演說部をえて、十分に隆盛の實を擧げ、各専門科を通じて其機關を演說部に求むるに至らしむべきと、並に本日の初會に於て秋月教授の勅語演說を請ひし所以は、謹嚴誠實を以て演說部の本領とせんことを欲する意に外ならずとの主意を演べられ。大塚總務は、簡單に龍南會の性質及び目的を述べ、紀念會其他の事項に就て新入生徒の注意を促し。次に秋月教授は謹んで勅語を奉讀し、其著勅語演說を朗讀せらる。拳々服膺すべき主意を敷衍講述し、句々熱誠より出づ。終て會長中川學校長は演說して曰く、

歐米諸國に於ては、學校教育は概ね知識を授くるとに止まるも、我邦にては、宗教の力殆んど皆無と云ふべき事情あれば、學校教育は智育と德育とを全時に引き受けざる可らず。是れ勅語を賜りたる所以にして、陛下も頻りに大御心を教育に傾け給ひ、當局者も聖旨を奉體えて獎勵を意らざると諸子の知る所あり。されば我邦にては、教育なる語を表するに education 或は instruction の字の一を以てする能はず。偕今日我校に於て智育、德育の兩者を併行せしむるを勉むと雖も、尙に行届かざる所あるを感ず。此等の欠點を補ふには、我龍南會を盛大にあすと最も必要ありとす。而して新入諸子の注意すべきとは、諸子各々其流義あらんも、務めて我に従ひ習ふべきとありとす。我文明の重なる勢力者は九州より之を生ぜり、是れらの素養あるに因るものにし、之が磅礴勃發し

入諸子も亦た之を以て其本領となすことを學ばざる可らず、

九州男兒の欠點は其長所に伴ふ、即ち後れたる所あるとあり。新舊生徒諸子は之に注意して長短相補ふべし。希くは新人生と舊生徒と相見て舊知の如くあれ。而して此等は皆龍南會によりて成さるべし。

次で湯原教師は教育家として日清戰爭を觀察し、其二要點を演べて曰く、

十年以前は歐化主義流行し、尋で其反動來り、或は國體論とあり、或は美術保存論とあり、所謂日本主義ある者行はれ、暫くして教育勅語喚發せられたり。されど此日本主義が急急の場合に如何はと効果あるやに至りては、誰も之を証言するものあらざりき。而して今日に至りて、我國粹は活動を始めたり、吾人其活動を牙山に於て又豐嶋に於て見る。『規則に依る道は遠く、實例に依る道は近し』とセネカの云へると、適切なりと謂べし。

教育家の職務は神聖なるに相違なしと雖も、所謂『名譽の中にある牢人』たるを免れず。さまば吾人は安心を職務に求めざる可らず。而してその結果は間接に現れ來るものなれども、是を決して虚榮にはあらざるあり。ビスマルク曰すや『セザンの戰勝は余とモルトケ將軍との功績にあらすして、小學教師の功績あり』と。

右終りて一同に茶菓を供し、胸襟を披て相談じ、午後四時に至りて散會しき。

○各組監督

もも監督たる語は、十分に我校の所謂「監督」の意義を表する者よめらず。何となれば、監督とは、監督する者の弱少なる者に對する處置を表するものあればあり。吾人は皆な既に分別を有し、自ら治め、自ら進退するを得れば、勿論師弟の關係は、小學教師のその生徒に對すが如きものにあらず。然らば我校の所謂「監督」の設けられたる主意、果して何くにありや。

吾人は切に之を疑はざるを得ず、今や數千の學校到る處に立ち、一週六日一日六時、其教ゆる所は

果てて何者ぞ、悉く高尚なる學理なり。高尚ある學理吾人固より之を嫌忌するものにあらず、然れども其教ゆる所の人は如何、其教へらるゝ所の人は如何、生徒は教師を呼で賣學の商人と云ひ、教師は生徒を目して店頭の人ありとあす。相和し相一致し、和氣霽々の間に理を講じ道を談じ、道學兩方から全ふせんと亦難からずや。維新前にありては、教師は生徒に對するゝ嚴を以て緯とし、愛を以て經とまゝ、之を教へ之を導き、生徒も亦教師に對しては、之を敬し之を慕ひ、一種掬すべき情味の裡に其修養を全ふしたりき。爾來二十余年、輕佻浮薄の風頻りに流行ま、此喜べく貴むべき美風を捨て、遂に今日の如きに至りぬ。我校、校長教師其人を得、未だ此の如き風に陥らずと雖も、亦た之あきを必とせざるあり。嘉納校長大に此に見るあり、次第に此風を去らんとま、各組監督を設けられたるも此計に外あらず。

とは、監督を設けられたる當初より於て、雜報子が好摸範と題して記せる一節よりして、之に依りて我校の監督なる者の意義を知るを得べし。吾人は此點に於て大に新入諸君の注意と覺悟を請はずんばあらず。本學年間の各組監督を定められたる今日に於て、注意を促すと決して無用にあらずと信ず。

○中川教授

誰か科學の研究を迂遠ありと云ふ、今日の文明は科學の進歩に負ふ所最も多しとするにあらずや。又誰か科學の研究を以て嗜味あきものとあす、熱心は愉快を生し、進歩を致すものなることを知らずや。而して銳意科學の研究に従事するもの、中川教授の如きは實に稀ありと云ふべし。壬辰の避暑休暇には沖繩の熱天焦地を跋渉して動植物採集を志し、幾多の標品中未だ發見せられざりしもの數十種を蒐集し、又昨夏は、有名ある不知火探検を企圖せせらるしが、今年に帝國大學實驗場に至りて實驗考究に従はれ、既に數旬の間滞在せらる思ふに平素の修養と新奇の探究とに依りて、大に發明する所ありしあるべし。彼の清風に息ひ、涼楊に睡り、悠逸を事とする者、實に慚愧に堪へざるべし。

せざる可らず。且や方今國家多事、國民は非常の覺悟と熱心ある勉勵とを要するに際し、吾人學生は十分に活潑の氣象と雄豪ある元氣とを振起し、以て克く文あると共に克く武あることを務めざる可らず。而して我校新學年に於て、幾多の新入諸君を迎ふるを得たれば、當に大に親睦會を擧ぐべき必要ありと謂べし。されば吾人は非常の盡力によりて、今回の紀念會を盛大にし、以て十分に祝賀の意を表するかと今時に、喜樂の目的を達せんとを熱望す。今や例により我會委員はうれしく其準備を取掛り、新奇ある工夫を凝しつゝあり。吾人は之を待つと、一日千秋の感なくんばあらず。

○職員の異動

囑託講師田中玄黃氏は其任を解かれ、助教授菱田爲吉氏は非職を命ぜられ、書記有吉復介氏は文部屬に轉任せり。今回新に非職山口高等中學校教授湯原元一氏獨逸語の授業を囑託せられ、司法官試補羽生慶三郎氏は法學通論及び英語の教授を囑託せられ、何れも奏任待遇。隈部富良氏は英語囑託、濟々贊助教藤本友世氏は獨逸語囑託にて何れも判任待遇となられたり。而して有吉書記の後任には、文部屬仙川公篤氏當校書記に任じ會計主任を命ぜられ、中臺重躬氏も亦當校書記に任せられ、和田傳、吉村新六の兩氏は當校雇申付學寮掛勤務とあられたり。

記に任せられ、和田傳、吉村新六の兩氏は當校雇申付學寮掛勤務とあられたり。體操監督後備陸軍大尉沼田九八郎氏、並に助教授三池全津、今永井大三の兩氏は皆充員令にて召集に應じ、目下入隊中あり。

○生徒の異動

學制改革の結果として、我校は非常なる影響を蒙り、生徒の異動著しきものあり。今其概略を記さん。

退學許可の分

補充竹内清澄 豫科三級横尾義薫 矢頭政治 本田龜男 永松友一 小野井郎 間野虎次郎 仲村鉄夫 長崎庄八 本田次夫 甲斐群藏 豫科二級谷村正友 月本猪介 高橋悌吉 吉岡準四郎 帆足啓一 豫科一級渡邊五郎 坂田恒雄

北原熊士

轉學許可の分

豫科卒業生岡山尙吉 酒井保 中山半太郎 後藤孝之助 以上第一高等學校へ轉學
豫科二級高原晃次郎 佐藤土之助 橋爪脩三 三谷百雄 今村常三郎 佐伯啓志 菊村敏夫 野田淳造 以上第三高等學校へ轉學

學 豫科二級内田綱太郎 同醫學部へ轉學

豫科二級勝目新平 野村綱安 以上造士館へ轉學

休學許可の分 豫科一級山本正雄 恆吉雄七

復校許可の分 豫科一級相賀三四郎 瀧川惣三郎

區域外各中學より入轉學の分 大學豫科三年法三文二人工七人理一人農一人 全二年法十二人文八人三部八人 全二

年法十七人文十六三部二十人三部六人 舊豫科三級一人

區域内各中學より入學の分 大學豫科一年法二十六人文十人二部二十六人三部十人

受驗入學者 舊豫科二級二人 全三級二十九人

而して大學豫科一年長峯安三郎氏は陸軍召集に應じ、舊本科一年古賀慶次郎氏は退學を命ぜられたり。終りて悲を以て記さるを得ざるとは、豫科二級長沼幸夫氏の今夏病死せられしとなり。

○各部概況 擊劍部には新に加入を申込む者多し。會長の獎勵、委員の精勤、以て將來の隆盛期

して待つべし。柔道部も相變らず昌あり。此兩部相並で稽古を勵むは、實に我校尚武の氣象の致す所ありと雖も、抑も亦時勢の急迫之が因を爲さずとせんや。戶外遊戲部は新に優秀の遊戲者を得て、何となく面白き様に覺はる。殊に十月十日の紀念會に於ける競争の準備の爲めに、活潑一段なる如し。弓術部には別段の變化なき模様あり。

○「龍南會雜誌」 新入諸君に告ぐ、表紙「龍南會雜誌」の五字、是れ丁丑の役、我銀杏城に據り

て薩の貔貅を拒ぎたる谷將軍の書する所、其筆勢の雄偉穩健亦以て將軍の風采を想ふ可らざらんや。諸君新たに熊城に來る、此地由來遊觀の地甚だ多からず、唯我藤肥州樂く所の銀杏城其堅天下無と稱す。仰いで城頭を望み、俯して此字に對す。諸君の感懷果して如何。

○壬辰會雜誌の廢刊 吉田山の麓、加茂川の湄、山紫水明の裏に繡腸を養へる、三中の機關

壬辰會雜誌は學校の變革に伴ひて空しく天玄ぬ。あはれ天鏡漸く澄みて浮雲蔽ひ、穠花咲かんと欲

西に或は東に、各其素養せる所を懷いて四散したるも、吾人の舊知壬辰會雜誌は、全く文壇を去りて其迹を潜めぬ、吉田山頭松賴天を吹いて永く飄々たるも、加茂河畔清流岸を洗ふて長へに捺々たるも、故の全朋三中の消息は何によりてか傳へん、何によりてか聞かん。敢て滿腔の全情を灑いで其終焉を吊す。

前號の重なる誤			
頁	行	誤	正
二	十六	全種とせざる	全種とせる
三十一	十一	畸人秒	畸人傳
五十八	上段十二	いつおへまて	いつこへまてと
六十八	十	特定稅權	獨定稅權